

方言性向語彙における比喩の生成と構造

—— 山口県防府市野島方言の場合 ——

室山敏昭

はじめに

方言生活語彙には、比喩発想によって造語された多くの要素が認められる。それらが地域社会に生きてきた人々の比喩心理の旺盛な活動の所産であることは、改めて指摘するまでもなからう。

この、地域社会における造語に働く比喩発想の問題は、早くから研究者の注目するところとなり、すでに、かなり多くの成果が蓄積されている。早い時期に属するものとしては、藤原与一の『日本人の造語法——地方語・民間語——』（1961）が注目され、近年に属する成果としては、愛宕八郎康隆の「方言研究の心理学的見地——造語・造文の比喩発想の視点から——」（1985）が特立されよう。

いずれも、方言の造語に見られる比喩心理の機構を究明した優れた成果であるが、しかし、問題とされる点が全く存しないわけではない。筆者の見るところ、両者に共通して指摘される問題点として、次の三点が挙げられる。第一点は、資料が各地の方言からアトランダムに抽出されているため、量的側面からの分析に客観性を欠くことである。第二点は、第一点と同様の理由によって、比喩の意味的カテゴリー（見立てのカテゴリー）と個別の地域社会における生活環境、生業などによって規定される文化的背景との関係が不透明なことである。第三点は、これが最も大きな問題点であるが、比喩発想が語彙によって確定された認識世界のすべてのカテゴリーにひとしなみに開かれていることを前提として、研究を行っていることである。確かに、比喩は、一般的にはすべての世界に向かって開かれていると言うことができるであろう。しかし、方言語彙に見られる比喩発想による造語の出現状況は、意味分野によって異なりを見せるだけでなく、意味分野の内部においても分布の異なりが認められるのである。また、たとえるものの意味的カテゴリーの種類や量的構造も、意味分野によって異なりを見せる。このことは、比喩による新しい想像的な象徴能力の働きやすい意味分野とそうでない意味分野とがあり、また、たとえられるものの基本的意味特性と比喩による認知能力ならびに表現との間には、ある種の制約関係が存したことを思わせる。

したがって、方言語彙に見られる比喩発想による造語の構造的特徴を客観的に解明するためには、まず、特定方言社会の特定意味分野を対象とする微視的な研究を行う必要があると考えられる。そこで、以下には、山口県防府市野島方言における性向語彙という一意意味分野を対象として、そこに見られる比喩発想によって造語された語群の構造的特徴を明らかにし、併せて、性向語彙の基本的意味特性と比喩による想像的認知との関係についても、いささか考察を加えてみることにする。

一 野島の地理的・社会的環境と調査の概要

野島方言の性向語彙における比喩について見てみるまえに、野島の地理的・社会的環境と調査の概要を、簡単に説明しておく。

1. 野島の地理的・社会的環境

野島は、防府市から東南の方向へ約15km離れた海上に位置する一島一集落からなる離島である。一般に、野島と称される地域には、野島・平島・沖の島の三島が存するが、野島を除く他の二島は無人島である。野島の主な産業は漁業で、小型底引網漁を中心とする瀬戸内海沿岸漁業の典型的なものであるが、経営規模は小さく、家族労働を主体とした零細漁業である。しかし、以前は集団をなして愛媛県佐田岬の沖合まで出かけ、帆船によるかなり大規模な網漁を行っていたという。農業は、自家用の野菜を栽培している程度であって、米作はほとんど行われていない。人口は、昭和30年の1050人をピークに年々減少の一途をたどり、現在では400人（男子176人、女子224人）、169戸となっている。島民は、野島の北側の入江にある野島漁港の周囲に限られた平地に、きわめて高密度に居住している。また、以前から防府市との交易関係が盛んで、漁獲した魚は防府市の魚市場へ出荷し、買い物も防府市へ出かけることが多いという。

2. 調査の概要

調査者は、浜田実佐子と筆者の2名である。浜田は、昭和58年8月から59年8月までの実質11日間、老・中・青・少の各年層の男女計15名について調査を行い、筆者は、昭和61年8月に3日間かけて中年層の男女各2名について、浜田の調査結果の確認・補充調査を行った。調査方法は、浜田は「島根県那賀郡金城町今田方言の性向語彙」（『広島大学方言研究会会報』第26号、1981）の分類体系を参照して独自に調査簿を作成し、それによって主に質問調査を行い、634語（連語、慣用句を含む）の性向語彙を採録した。筆者は、それらの語彙について、主として使用頻度と語源意識を確認し、併せて、「広島県方言の性向語彙資料」（『内海文化研究紀要』第15号、1987）の基礎資料を用いて質問調査を行い、新たに22語を補充した。

二 野島方言の性向語彙における比喩の生成

野島方言の性向語彙における比喩について、まず、注目されることは、以下に示す例によっても知られるように、たとえるもの（喩材）の取りたてかたに認められる特異性である。これを、仮に、“見立ての特異性”（あるいは“類推的認知の特異性”）と呼ぶことにすると、この“見立ての特異性”は、筆者の現在までの調査による限り、当該方言にしか認めることができないという“方処性の特異性”にそのまま重なる。

A. 海の動物にたとえたもの

- a. 魚……①ノットケノトーゴロイワシ ②トーゴロイワシ、③トーゴローとも言う。トーゴロイワシは鱗が多くて煮ても焼いても食えない、副食物としては全く役に立たない魚である。そこから、全く役に立たない怠け者に見立てた)、④ダイチョーノキモ (ダイチョーは磯辺にいる小さな魚で、肝も小さい。そこから、小心者に見立てた)、⑤アオチャンギリ (アオチャンギリは釣りをしている餌だけとってな

かなか針にかからない。そこから、意地悪くがつがつ食べる人に見立てた)

- b. 貝………⑥センジマサザエ (センジマサザエは口が大きいわりに中身が小さい。そこから、口は達者だが中身の伴わない人に見立てた)
- c. 空想上の動物………⑦エンコーハダ (河童の肌はぬるぬるしていて、何でもすつと落ちてしまう。そこから、お金が身につかない人に見立てた)

B. 海の現象にたとえたもの

- a. 潮………⑧カタシオナキ (片潮泣き、片潮は6時間。長く泣き続ける子供をカタシオに見立てた強意的比喩)

C. 人名・屋号にたとえたもの

- a. 人名………⑨チュエゾー (チュエドーとも言う。忠蔵か? 昔、この島にいたひどい怠け者の名を、怠け者を意味する普通名詞に転用した)、⑩ロクオジー (昔六之丈という大変きれいずきな人がいた。その人の名を、必要以上にきれいずきな人を意味する普通名詞に転用した)、⑪モンコーゾー (昔、モンコーという自分のことはしないでも他人の世話をしていた人の名を、世話ずきを意味する普通名詞に転用した)、⑫キンペーサー (昔、キンペーといういつも汚くしていた人がいた。その人の名を、汚くしている人を意味する普通名詞に転用した)、⑬サヘー (昔、佐兵衛という冗談をよく言う人がいた。その人の名を、冗談言いを意味する普通名詞に転用した)、⑭ヨモー (昔、与茂兵衛といういつもぶつぶつ不平ばかり言っていた人がいた。その人の名を、不平言いを意味する普通名詞に転用した)

- b. 特定の屋号………⑮ウズヤ (昔、いつも汚くしていた白屋という屋号の家があった。その屋号を、汚くしている人を意味する普通名詞に転用した)

D. 社会生活にたとえたもの

- a. 本土の人間のもの言い………⑯ロクグチイー (陸口言い、本土の人間はよく陰口や悪口を言うところから、陰口・悪口を言う人にたとえた)、⑰ロクグチオユー (陸口を言う、同上)

これらの比喩は、いずれも成立時期を確定することはできないが、一応、野島集落の人々が独自に製作したものと考えてよいであろう。

さて、これらの比喩に関して、先に、“見立ての特異性”を指摘したが、それは、語数の多いA、Cについて言うと、Aがいずれもあまり名の知られていない海の動物であり、Cがいずれもかつてこの島に実在した人の名や屋号であるという事実である。このような特異な比喩が、当該方言社会において生成された理由は、比較的容易に推察することができる。Aに関しては、当該方言社会が以前から現在に至るまで典型的な漁業社会として存立してきたという点に、その理由を求めることができるであろう。野島集落が、離島に存する集落であっても、農業社会であったならば、仮に、「トーゴロイワシ」「アオチャンギリ」「ダイチョー」などの魚名を知っていたとしても、その形状や習性を精確に認知することは困難だったと考えられる。ましてや、これらの魚の形状や習性の特徴を、相互の類似性に基づいて人間の性向に転写し、新たな視点から表現することなど、ほとんど不可能であったろう。成員の大半が魚に精通している漁業社会であったから、このような創造的な象徴能力を獲得することができ、それがいちはやく社会の共有認識となって、今日まで継承

されてきたと考えられるのである。Bの「カタシオナキ」も、同様であろう。ここに、造語に働く比喩心理の漁業社会独自の均質性を認めることができる。

一方、Cに属する比喩は、一島一集落という閉鎖的で求心的な社会に形成されるきわめて濃密な人間関係のネットワークがその生成要因であることは、ほとんど説明を要しないであろう。そして、野島集落の閉鎖性を、本土社会への対立意識として顕在化させたものが、Dの見立てにほかならない。

比喩は、原理的には、どのような対象が他のどのような対象に関連づけられるかに関する制約は存在しないと行うことができるであろう。しかし、野島方言の性向語彙に認められる比喩には、当該集落の社会構造の特性が明確に反映しており、その意味で一種の社会的制約が認められるとしなければならぬ。しかも、このことは、島根県浜田市における漁業従事者が、「オキニシ」（北西風、急に強く吹き出して海を荒らすことから、急に怒り出す短気者に見立てた）、「ドチザメ」（動きが鈍くいつも藻の中に隠れているところから、なかなか仕事をしようとしないうっかり者に見立てた）のような比喩を用いることから分かるように、ひとり野島方言だけに認められる特殊な事実ではないのである。

三 野島方言の性向語彙における比喩の造語法

ついで、当該方言の性向語彙における比喩について、造語法の観点から検討することによって、その特徴傾向を明らかにすることとする。比喩発想によって造語された要素は、語詞形成と意味の二つの側面から見ると、大きく、A. 転成法とB. 複合法とに分別される。

A. 転成法

まず、転成法について見てみることにする。転成法は、

1. 数詞から転成を見たグループ
2. 意味の転成を見たグループ

の二類に整理できるように思われる。言うまでもなく、性向語彙における比喩は、すべて共通の属性の認知によって、その語本来の基本的意義特徴（中核概念）が消去されることによって性向語彙の要素になっているわけだから、すべての要素に意味の転成が認められるとしなければならぬ。ただ、数詞から転成を見たグループに属する要素を見ると、数詞そのものには意味の転成が認められず、しかもその数詞がある基準的なものから外れる点に、性向との共通の属性が認知されることになるわけで、2のグループよりも抽象度（間接性）の高い比喩となる。したがって、このグループを特立することにする。

1. 数詞から転成を見たグループ

このグループには、次の12語が認められる（〔 〕内は性向語彙の意味項目名）。

- ①セ^ンミツ（千に三つしか本当のことがない）〔嘘つき〕、②ハチモンセン（八文銭、少し足りない人）〔馬鹿者〕、③ニマイジタ（二枚舌）〔どちらにでもつく人〕、④マンネンゴヨミ（万年曆）、⑤マンネンジビキ（万年字引）〔以上、見識の広い人〕、⑥サンパチタロー（三八太郎、何もかも身につけていて手際よくやる人）〔仕事を手際よくやる人〕、⑦サンジューバライ（三十払い、後片付けをしない人）〔後片付けの悪い人〕、⑧ジューゴンチ（十五日、この日に小潮から大潮が変わるので、潮の流れが速くなり干満の差が大き

くなるところから、気分が急に変わる人にたとえた)、⑨ニフンフダ (二分札、全く役に立たない馬鹿者)、⑩ニフン (⑨の省略形)、⑪サンブンフダ (三分札、全く役に立たない馬鹿者、⑨よりも程度が小) [以上、馬鹿者]、⑫ロクジューオ ユー (六十を言う、年寄りじみた生意気なことを言う) [生意気な人]

このうち、①②③④⑤⑦は、いずれも発想上、基準的なものが意識されており、それに外れるところにおかしさ②、畏敬④⑤、侮蔑①③⑦の心理が働くことになる。特に、①は千と三という数の大きな差を対比することによって、強意的比喩となっている点が目される。これらに対して、⑧は「ジューゴンチ」そのものが基準となっており、漁業社会ならではの比喩発想である点が注意をひく。さらに、⑥はもともと「下男」の比喩であり、⑨⑩⑪は「下級の娼婦」の比喩であって、いずれも比喩の転換を見せるものである。このように、「数詞から転成を見たグループ」には、発想、生成を異にする三つのタイプの比喩が認められるわけで、その内実は決して単純ではない。

2. 意味の転成を見たグループ

野島方言の性向語彙には、比喩発想によって造語された要素が162語(比喩的慣用句を含む)認められ、性向語彙全体の24.6%強を占める。比喩発想を生起させるのは、たとえるものととえられるものとの間に存在する共通の属性の発見であるが、比喩が成立するためには、たとえるものの中核概念がとえられるものの中核概念へ転写されなければならない。語彙に認められる比喩は、このようなプロセスの慣習化を通して意味の転成を見たものである。

そこで野島方言の性向語彙における比喩が、全体としてどのような意味の転成を見せているかを明らかにするため、一々の比喩の基本的意義特徴(中核概念)を確定し、それによって、意味的カテゴリーの体系と量的構造を帰納することとする。そのためには、分析の対象を、中核概念を単一の意味的カテゴリーに分類することが可能な要素に限定する必要がある。したがって、以下の分析においては、単純語、派生語、比喩的慣用句を対象とし、複合語は除くこととする。複合語の場合は、たとえば、「コシカケオンボー」を例にとると、後部形態素の「オンボー」によって中核概念を「職業」と規定することはできない。なぜなら、前部形態素の「コシカケ」の中核概念である「身体動作」と結合することによって、「腰かけたままで働こうとしない怠け者」という性向に転写されることになるからである。したがって、複合語の場合は、単一の意味的カテゴリーに分類することができないことになる。なお、人名・屋号は固有名詞なので、単純語に含めて処理することとする。

A. 人間 (54語)

- a. 人名……①チュエゾー、②キンペーサー、③ロクオジー、④モンコーゾー、⑤サヘー、⑥ヨモ、⑦トモエゴゼン (巴御前、勝ち気な女性)、⑧サラシナ (更級、同前) [以上、気の強い人]、⑨トキワ (常磐御前、気分の変わりやすい女性) [むら気な人]
- b. 屋号……ウスヤ
- c. 職業・身分……①アナウンサー、②ペンシ (弁士)、③ペンゼツカ (弁舌家) [以上、話上手な人]、④ツカサ (司、人格者) [人柄の良い人]、⑤コーシャクイー (講

積言い) [理屈っぽい人]、⑥サムライ (侍)、⑦ブシ (武士) [以上、頑固者]、⑧キョーキヤク (俠客)、⑨キョーキヤクモノ (俠客者)、⑩キョーキヤクハダ (俠客肌) [以上、親分肌の人]、⑪ハカセ (博士)、⑫ガクシヤ (学者) [以上、見識の広い人]、⑬ホイトー (食べ物に卑しい人)、⑭アカホイトー (同前、⑬よりも程度が大) [以上、食いしん坊]

d. 異人……①トージン (唐人)、②アカトージン (同前、①よりも程度が大) [以上、馬鹿者]

e. 動作・行為……①ニギリ (握り、けち) [けちな人]、②ナキテ (泣き手、不平ばかり言う人) [不平言い]、③ホイキチ (よく泣く子)、④アカホイキチ (同前、③よりも程度が大) [以上、泣き虫]、⑤イクスギモノ (出しゃばりすぎる人)、⑥イクスギモン (同前) [以上、出しゃばり]、⑦カラゲヤ (自慢ばかりする人)、⑧カラゲル (自慢する) [以上、自慢する人]、⑨テガ サバケチヨル (仕事を手際よくこなす)、⑩スクテサステガ ナイ (過不足なく何でもできる) [以上、仕事を手際よくこなす]、⑪クチガ サエル (口が冴える)、⑫ベンガ タツ (弁が立つ) [以上、口の達者な人]、⑬キモー ヤク (肝を焼く) [世話ずきな人]、⑭ホラガイ フク (法螺貝を吹く、大袈裟に言う)、⑮フロシキオ ヒロゲル (風呂敷を広げる、大袈裟に言う)、⑯オーフロシキオ ヒロゲル (同前、⑮よりも程度が大)、⑰オーバチオ ユー (大鉢を言う、大袈裟に言う) [以上、誇り家]

f. 態度……①アタマガ タカイ (頭が高い) [威張った人]、②コシガ オモター (腰が重い) [仕事をしない人]

g. 精神・感覚・知識……①ハラガ スワッチョル (腹が据わっている)、②キモガ フトイ (肝が太い)、③ドーギモガ フトイ (同前、②よりも程度が大) [以上、度胸のよい人]、④キモガ ヨワー (肝が弱い)、⑤キモッタマガ ヨワイ (肝っ玉が弱い)、⑥シンドーガ ヨワー (心臓が弱い) [以上、気の弱い人]、⑦カンドリガ ワルイ (勘取りが悪い) [仕事の要領の悪い人]、⑧カオガ ヒロイ (顔が広い) [見識のある人]

B. 自然 (19語)

a. 自然現象……①ヒヨリ (日和、気分の変わりやすい人)、②ヒヨリモン (同前、③テンキヤ (天気屋、気分の変わりやすい人)、④オテンキヤ (同前)、⑤オテンキモノ (同前) [以上、むら気な人]

b. 動物

(a) 海の動物

ア. 魚……①トーゴロイワシ、②トーゴロー、③アンコー (鮫鯨は口を開けたまま餌がひとりでに入ってくるのを待っている、働こうとしない人にとえた) [以上、怠け者]、④アオチャンギリ [食いしん坊]、⑤イヨーサク (「イヨー」は「イオ」の音訛形) [小心な人]

イ. 貝……⑥ホラガイ (法螺貝) [誇り家]

(b) 陸の動物

ア. 獣……⑦カオン (獺) [嘘つき]

- イ. 鳥………⑧トビ (鳶、人を騙したり誤魔化したりするような人) [油断のならない人]、⑨サイドリ (鳥の囁り、よくしゃべる人)、⑩ウトーサイドリ (同前、⑨よりも程度が大) [以上、おしゃべりな人]
- c. 植物………①シブ (渋柿) [無愛想な人]、②イガ (稗粟)、③イガサー (同前) [短気な人]
- d. 鉱物………①イシ (石) [頑固者]
- C. 事物 (16語)
- a. 製品………①キカイ (機械のように休まずに働く人、少年層だけが使う) [働きの早い人]、②ヒコキ (飛行機、仕事をするのが特別早い人、少年層だけが使う) [仕事の早い人] ③タイホー (大砲)、④バクダン (爆弾) [以上、誇大家]、⑤テレビ (青年層以下が使う) [評判言い]、⑥クドロ (傷があつて使いものにならない品物、性根の悪い人)、⑦ヒチクドロ (同前、⑥よりも程度が大)、⑧ウトクドロ (同前、⑧よりも程度が大) [以上、性根悪・意地悪]
- b. 道具………①フロシキ (風呂敷、大袈裟に言う人)、②オープロシキ (同前、①よりも程度が大)、③オーバチ (大鉢) [以上、誇大家]、④パイプレンチ (何にでも使える道具であることから、出ししゃばりにたとえた、青年層以下が使う) [出ししゃばり]
- c. 事物の状態………①シメンガ アウ (四面が合う、仕事ができちんとしている) [仕事を丁寧にする人]、②シメンガ アワン (四面が合わない) [仕事雑な人] ③ヨリガ アマイ (縋りが甘い、網にとりつけた網の縋りが甘いと漁をするとき全く役に立たないところから、何の役にも立たない馬鹿者にたとえた)、④ヨリ (同前) [以上、馬鹿者]
- D. 社会・文化 (7語)
- a. 社会………①セケンガ ヒロイ (世間が広い)、②ショケンガ ヒロイ (同前) [以上、見識の広い人]、③セケンガ セバー (世間が狭い)、④ショケンガ セバー (同前) [以上、世間知らず]、⑤セケンオ セル (世間をする、見識を広める) [見識の広い人]、⑥ショヤクセル (世話役をする) [世話ずきな人]
- b. 文化………①デンボウ (電報、他人の噂話をよくする人) [評判言い]
- E. 神仏 (3語)
- a. 仏………①ジドー (地藏)、②ジドーサマ (地藏様) [以上、何があつても感情を顔に出さない人]、③ホトケサマ (仏様) [人柄の良い人]
- F. 食 (2語)
- a. 料理………①ヨマシ (裸麦を米に混ぜて炊くとき裸麦がぶつぶつ音をたてて煮えるので、ぶつぶつ不平ばかり言う人にたとえた) [不平言い]、②スガ スギチヨル (酔が過ぎている、人並み以上に何でも出来る) [仕事を手際よくやる人]

以上が、中核概念の細分化と語彙量の多さを基準として帰納した野島方言の性向語彙における比喩の意味的カテゴリーの体系である。と同時に、これは、性向に即して言うならば、たとえる対象への想像的認知のカテゴリーの体系を示すものに外ならない。

さて、野島方言の性向語彙における比喩の意味的カテゴリーの特徴は、どのような点に認められるのであろうか。このことを明らかにするために、まず、鳥取県気高郡気高町姫

路方言の魚名語彙に認められる比喩の意味的カテゴリーと比較してみることにする。

野島方言の性向語彙

意味的カテゴリー	語数	%
人 間	54	53.0
自 然	19	19.0
事 物	16	16.0
社 会・文化	7	7.0
神 仏	3	3.0
食	2	2.0

姫路方言の魚名語彙

意味的カテゴリー	語数	%
自 然	12	60.0
事 物	4	20.0
人 間	2	10.0
衣	2	10.0

両者の差異は、一見して明らかである。一般に、方言比喩においては、いわゆる擬人喩は意外に振るわず、むしろ逆に、人事を自然物や自然現象にたとえる擬自然喩とでも言えるものが目立つ。しかし、野島方言の性向語彙における比喩にあつては、人間に関するものが53.0%を占めるのに対して、自然に関するものは19.0%にとどまる。しかも、人間に関する意味的カテゴリーが最も細分化しており、語彙量、体系の両面において、擬人喩の方向への著しい展開が認められるのである。この事実は、筆者の経験によると、ひとり野島方言に限られることではない。ここに、方言性向語彙における比喩の一つの特徴傾向が存ずるとしてよかろう。この点で、姫路方言の魚名語彙の場合とは、まさに対照的である。特定地域社会の生活語彙においては、比喩は決してあらゆる対象に向かってひとしなみに開かれているわけではない。比喩もまた、各意味分野の意味的特性を背景にしているのである。

これに関連して注目されることは、自然の意味的カテゴリーに属する動物の意味枠において、海の動物の語数が陸の動物の語数よりも多くなっているという事実である。これは、すでに前節でも触れたように、野島集落の生業の特性が、想像的認知に対してなにほどか規制を及ぼしていることの現れ、と解することができるであろう。これに関連して、事物の意味的カテゴリーのb. 道具の中に、「オーバチ」という比喩が見出されるのも、漁業社会における食生活を反映するものと解することができる。

注目される第三の点は、すべての意味的カテゴリーにおいて、接頭辞・接尾辞をとる比喩が栄えているという事実である。方言性向語彙には、そのような性向の人であることを明示したり、性向の程度性を強調するために、多様な接頭辞や接尾辞をとる多くの派生語の存在が認められるのである。野島方言の性向語彙には、29種の接尾辞と11種の接頭辞が認められるが、比喩には、そのうち、「モノ・モン・ヤ・テ・キチ・サク・タロー・カ・ジン・シ・ハダ・サン・イー」の13種の接尾辞と「アカ・ヒチ・ウトー・オー」の4種の接頭辞が見出される。そして、これらの接尾辞・接頭辞をとる派生語の総数は28語となる。この事実も、性向語彙における比喩の一つの特徴傾向と見なすことができる。

注目される第四の点は、製品の意味的カテゴリーに「パイブレンチ」「キカイ」「ヒコーキ」「テレビ」などの若年層しか使用しない比喩が認められるという事実である。これらは、

当該方言の性向語彙における new metaphorであり、たとえの対象の非日常性、外来語の使用などの点で、その他の比喩に対して、際立った特異性を示すものである。新しい胎動を思わせるこの種の比喩が、今後、地域社会における性向語彙の中で、どのような動向を示すかに興味が持たれる。

第五点として、人間の意味的カテゴリーに属する「動作・行為」「態度」「精神・感覚・知識」の意味枠に、身体語による比喩的慣用句が多用（13語）されている事実が注目されるが、性向を身体比喩を用いて具象的なイメージを喚起する技法は、共通語の世界においても盛んである。

B. 複合法

次に、複合法について見てみる。野島方言の性向語彙における比喩発想の造語には、複合名詞に限定しても、11種の語詞形成のパターンが認められるが、語数の多さから、〔1〕「名詞+名詞」（16語）、〔2〕「名詞+ノ+名詞」（7語）、〔3〕「名詞+動詞連用形」（6語）の三つが、基本的なパターンと見なされる。この三つのパターンで、全体の72.5%を占めるのである。以下には、この三つのパターンのおのおのに所属する比喩を示し、簡略な検討を加えることにする。

〔1〕「名詞+名詞」（40.0%）

①ロクグチ（陸口）〔油断のならない人〕、②ワニグチ（仏堂・拝殿の前面の軒につるされた大きな鈴の下に広い裂け目があるところから、口が達者で必要以上によくしゃべる人にととえた）、③ワネグチ（同前）〔以上、口の達者な人〕、④ホイトボーズ（食べ物に卑しい人）〔食いしん坊〕、⑤ヒルアンドフ（昼行灯、ぼんやりして気のきかない人）〔気のきかない人〕、⑥マタクラコーヤク（股くら膏薬、気分によってあちらについたりこちらについたりする人）、⑦マタグラコーヤク（同前）〔どちらへでもつく人〕、⑧キカイニンゲン（機械人間）〔働き者〕、⑨エンコーハダ（浪費家）、⑩ショーク（世話役）〔世話ずきな人〕、⑪カンシヤクダマ（癩癩玉）〔怒りっぽい人〕、⑫ホーソーキョク（放送局）〔評判言い〕、⑬トビタカ（鳶、人を騙したり人の物をかすめ取ったりする人）、⑭トビカラス（鳶鳥、同前）〔油断のならない人〕、⑮ヤマカワ（山川、人が山と言えば川と言うようなひねくれ者）〔ひねくれ者〕、⑯ネツテツ（熱鉄、人一倍仕事に打ち込む人）〔必要以上に仕事に精を出す人〕

①②③④⑧⑨においては、前部形態素と後部形態素との間に比喩の「の」が予想され、直喩的である。また、⑤⑥⑦にも「の」助詞が予想されるが、これらは単純な連体格の助詞であって、全体、隠喩的である。一方、⑬⑭⑯においては、「と」助詞が予想されるが、⑬⑭が同様の属性を持つ鳥を累加することによって、強意的比喩となっているのに対して、⑯は「山」と「川」とが対立する関係にあり、「と」の機能が異なる。

〔2〕「名詞+ノ+名詞」（17.5%）

①ノットクフトーゴロイワシ〔怠け者〕、②ダイチョーノキモ、③ミノキンタマ（蚤の金玉）、④ミノノキモ（蚤の肝）〔以上、小心者〕、⑤ネコノメ（猫の目、くるっと気分の変わる人）〔むら気な人〕、⑥ハスケノイヌ（見かけは強そうな人）〔気の強い人〕、⑦ホッコクノカミナリ（北国の雷は北で鳴るので着たなりにととえた）〔着たきり雀〕

これらは、語詞形成が単直平明で、比喩発想の動きがそのままことばになったという趣

のものである。②③④は、「小心者」を小さな魚や蚤の肝に見立てていて、極端な縮小化による比喩の誇張（強意的比喩）が認められる。ここに、おかしみや滑稽さが感得される。

〔3〕「名詞+動詞連用形」（15.0%）

- ①ヒダリマキ（左巻き）〔馬鹿者〕、②フンドシカツギ（褌担ぎ、お世辞を言って人の機嫌をとる人）〔お世辞言い〕、③ヒヨリミ（日和見）〔むら気な人〕、④カタシオナキ〔泣き虫〕、⑤カンショーヤミ（勘性病み、必要以上にきれいすぎな人）〔きれいすぎな人〕、⑥コーシャクガタリ（講釈語り）〔理屈っぽい人〕

このボタンは、複合名詞であっても、後部形態素が意味上、微妙な動きを残している点で、外部に具体的な動きとして現れる性向を比喩化するのに利便であったと思われる。

当該方言の性向語彙における比喩のうち、複合名詞の造語ボタンとしては、以上のものが中心を成すが、これは、比喩に特徴的なことではなく、そもそも性向語彙において、これらが基本的なボタンとなっているのである。

以上、野島方言の性向語彙に認められる比喩を、意味と語詞形成の両面から分析することによって、比喩の構造とその特徴傾向を明らかにすることができた。しかし、当該方言の性向語彙における比喩の構造を解明するためには、比喩の意味、語詞形成の分析とは別に、性向語彙そのものの構造の枠組との関係において、比喩の現れ方を見てみる必要があるであろう。

四 野島方言における性向語彙の構造の枠組と比喩

野島方言の性向語彙の構造は、他の方言と同様に、意味と評価の二つの枠組みの交差によって形成されている。意味枠は四つの階層に弁別され、最下位に一つの性向を表す相互に最も緊密な類義関係を形成する75の意味項目が認められる。また、評価枠はプラス評価とマイナス評価とに二分され、プラス評価語彙が133語、マイナス評価語彙が523語認められる。以下、意味枠、評価枠の順に、比喩の現れ方を見ていくことにする。

1. 意味枠と比喩

まず、最上位において弁別される意味枠と比喩の語数ならびに各意味枠の異語数に対する割合との関係を見てみると、次のようになる。

- A. 動作・行為の様態に重点を置くもの……………62語（27.1%）
B. 言語活動の様態に重点を置くもの……………31語（30.0%）
C. 精神の在り方に重点を置くもの……………33語（24.2%）

Bの比率が最も高く、Cの比率が最も低くなっているのは、Bが最も具体的な行為として顕在化する性向であるのに対して、Cが内面的でしかも総体的に捉えられる性向だからだと解される。しかし、両者の間に、わずか5.8%の差しか認められないので、最上位の意味枠においては、比喩発想の展開に特別な偏りは見られないと言ってよからう。

一方、最下位に位置づけられる意味項目について見てみると、比喩が全く認められない項目が15項目存する。それを、個々の意味項目が属する最上位の意味枠に即して示すと、次のようである。なお、意味項目の後の（ ）内の数は異語数を表す。

- A. 動作・行為の様態に重点を置くもの（意味項目数……………49）
a. 辛抱強い人（4） f. わがままな人（7）

- b. 放蕩者 (11)
- c. せっかち (5)
- d. 遠慮がちな人 (3)
- e. お転婆 (2)
- g. 向こう見ずな人 (5)
- h. 愛想の良い人 (4)
- i. 儉約家 (5)

B. 言語活動の様態に重点を置くもの (意味項目数……11)

- j. 無口な人 (3)
- k. 皮肉屋 (3)

C. 精神の在り方に重点を置くもの (意味項目数……15)

- l. 陰気な人 (2)
- m. 陽気な人 (3)
- n. しつこい人 (5)
- o. 凶々しい人 (2)

A、B、Cのそれぞれについて、比喩の認められない意味項目の比率を求めると、A (18.4%)、B (18.2%)、C (26.7%) となり、Cの比率が最も高くなっている。この結果は、先に見た比喩の語数の場合とほぼ同様の結果を、示すものである。したがって、意味棒と比喩との関係については、その性向が感覚的に捉え得るある具体的な特徴をもって顕在化しない場合には、いくぶん比喩発想が生起しにくい傾向が存すると言うことができるであろう。この傾向を最も端的に示すのが、Aの「遠慮がちな人」「儉約家」、Bの「無口な人」の意味項目に比喩が認められないという事実である。

2. 評価棒と比喩

まず、当該方言の性向語彙におけるプラス評価語彙・マイナス評価語彙の割合と両者に認められる比喩の割合とを対比する形で示すと、右の表のようになる。

	プラス評価語彙		マイナス評価語彙	
	語数	比率	語数	比率
全語彙	133	20.3	523	79.7
比喩	44	27.2	118	72.8

この表から、マイナス評価を表す語彙に多くの比喩が榮えており、しかもその比率は、マイナス評価を表す全語彙の比率にきわめて近いことが知られる。比喩発想は、原理的には評価によって規制されることはないと考えられるが、当該方言の性向語彙においては、他の多くの方言の場合と同様に、比喩発想がマイナス評価の方向へ大きく傾斜しているのである。このことから、方言性向語彙における比喩発想は、性向語彙全体に認められる「負の原理」と緊密な相関関係を示すものであることが理解されるのである。当該方言における性向語彙の比喩に認められる、この「負の発想傾向」とも呼ぶべき事実は、比喩という想像的認知においても、当該社会が是とする行動規範から逸脱する性向に対して、つねに強い関心が向けられてきたことを意味するものに外ならないであろう。

しかし、この「負の発想傾向」は、すべての意味的カテゴリーにひとしなみに認められるわけではない。ちなみに、「人間」のカテゴリーと「自然」のカテゴリーとを比較すると、右に示すような著しい差異が見出されるのである。

	プラス評価	マイナス評価
人間	18語	35語
自然	0	19語

この表から、人間の性向を、「人間」のカテゴリーに写像する場合と「自然」のカテゴリーに写像する場合とは、明らかに価値意識の相違の存したことが理解されるのである。

おわりに

以上、野島方言における性向語彙の比喩の生成と構造に関して、基本的な視点からの分析、考察を行った。その結果、性向語彙における比喩は、基本的には、性向語彙という意味分野の意味的特性によって規制され、評価軸と緊密な相関性を示すものであることが明らかとなった。過度の一般化は慎まなければならないが、これによって、方言比喩の生成と構造は各意味分野の特性を背景とする、という仮説を提示することは許されるであろう。また、当該方言の性向語彙における比喩の分析を通して、性向語彙の生成に関わる社会的要因を解明でき、性向語彙が他のどのような意味的カテゴリーと関連するかという問題も明らかにすることができた。このような問題の解明は、おそらく、意味分析や形態分析の方法によっては不可能であろう。

このことは、今後、社会心理の所産である方言性向語彙の構造分析を通して、地域社会における集団的な行動規範や対人評価のネットワークをより具体的に解明していくために、比喩が重要な視点となることを示唆するものである。また、性向語彙の意味的特性と比喩による認知能力ならびに表現の間には、かなり緊密な相関関係の存することが明らかになったので、今後の方言比喩の研究においては、意味分野ごとの異同を多角的な観点から分析、検討していくことが重要な課題とされるであろう。

(1991・12・10 改稿)

【参考文献】

- 愛宕八郎康隆「国語方言の発想法（一）」（『長崎大学教育学部人文科学研究報告』第21号、1972）
愛宕八郎康隆「国語方言の発想法（二）」（『長崎大学教育学部人文科学研究報告』第22号、1973）
愛宕八郎康隆「方言研究の心理学的見地——造語・造文の比喩発想の視点から——」（『方言研究年報』通巻第28号、1985、和泉書院）
佐藤信夫『レトリック感覚』（1978、講談社）
中村 明『比喩表現の理論と分類』（1977、秀英出版）
藤原与一「命名と造語」（『日本民俗学大系10 口承文芸』1959、平凡社）
藤原与一『日本人の造語法——地方語・民間語——』（1961、明治書院）
室山敏昭『地方人の発想法——くらしと方言——』（1980、文化評論出版）
安本美典「直喩と暗喩——比喩の心理学」（『ことばの宇宙』2-11、1967）
山梨正明『認知科学選書17 比喩と理解』（1990、東京大学出版会）